

第2章 もともと何のための飛行場だったのか

その1 「予科練」

◎ 予科練とは

太平洋をめぐる第2次世界大戦は、日本軍の真珠湾攻撃によって航空機が主役に躍り出た時代でした。

飛行機に熟練するには長い年月がかかるので、15歳から17歳の少年を採用して2年半航空搭乗員としての基礎を学習する。これが飛行予科練習生「予科練」であり、この過程を終了した後、本科練習生として操縦・整備・偵察などの各専門過程に進み、やがて実戦部隊に配属されていきました。



←茨城県土浦海軍航空隊
での予科練習生

この制度が始まったのは1930年。最初は尋常高等小学校卒業の採用でした(のちの乙種予科練習生)。その後、旧制中学4年1学期終了の生徒が採用されるようになりました(甲種予科練習生)。戦況の悪化により甲種は旧制中学2年1学期終了に。

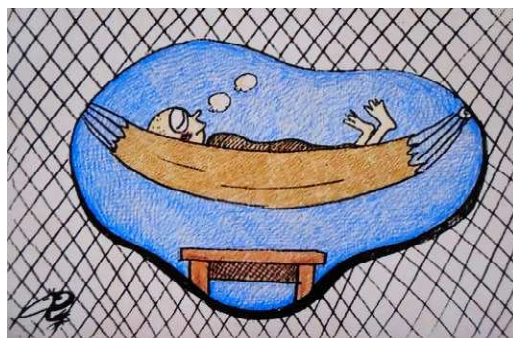
◎ 予科練習生の大量募集

天理の予科練習生たちの学習をする前に、今回は1942年10月三重県鈴鹿基地に集められた予科練習生の様子を見てみましょう。

1941年12月日米の戦争が始まると共に航空機の重要性が認識され、それまで100名から250名であった募集人数が甲11期(1942年10月入隊)になると約1200名に一気に増えました。

1942年6月5日ミッドウェー海戦敗北で多くの航空機・搭乗員を亡くし、海軍は急ぎょ一年以内に10,000名の航空機搭乗員養成を計画したことが原因と考えられます。

◎ 鈴鹿基地での様子

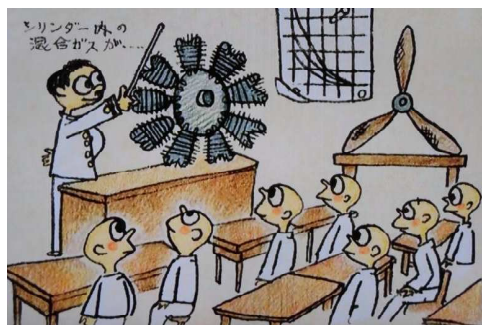
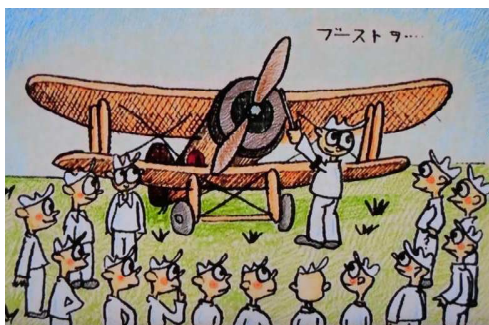


NHK2012年8月16日放送「マンガ少年の戦争」より予科練の生活を学習しましょう。

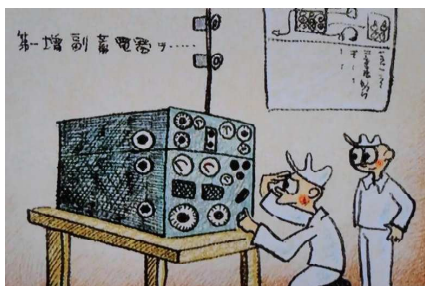
このマンガを描いたのは1942年鈴鹿基地に予科練習生として入隊した山崎祐則(すけのり)さんです。とてもマンガの上手な若者で、入隊してから19歳で戦死するまで100点をこえるマンガに軍隊の生活を残しています。



朝5時の起床・吊り床(ハンモック)片付け・甲板(廊下)磨き



機体の仕組み・エンジンの学習



通信実習



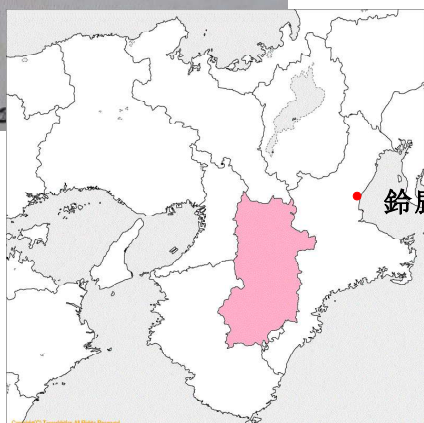
戦闘訓練

上は基本的な学習の一場面です。また、「予科」の段階ですので兵士としての基本的な陸上戦闘の訓練も行われました。

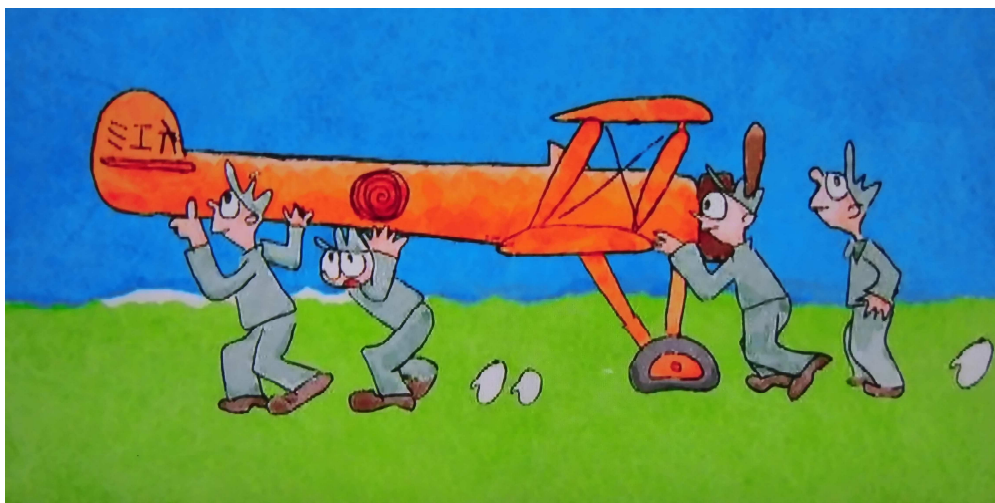
下の図は、三重県鈴鹿より奈良への行軍演習の様子です。この頃はまだ天理の地に基地は作られていませんでした。戦争のことはウソのような、まさに青春の一日という風景です。



奈良行軍の様子

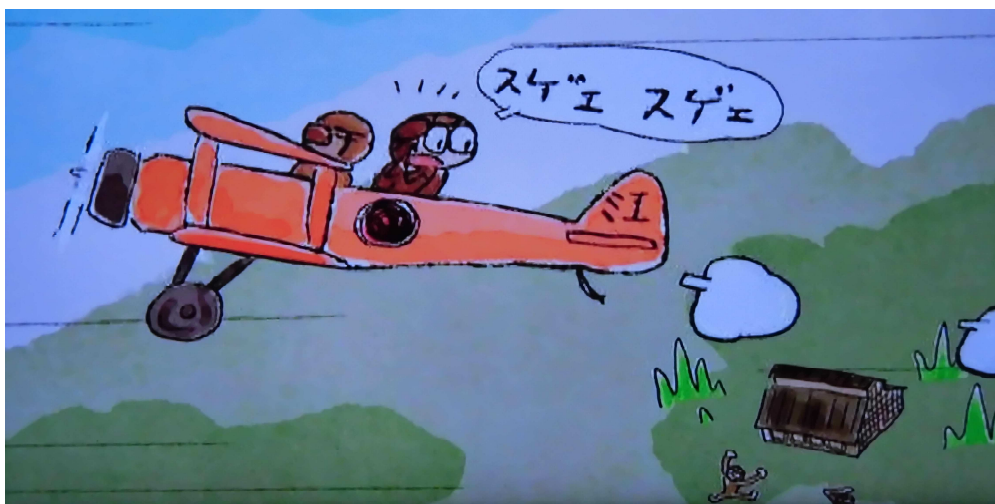


◎ 三式初歩練習機を移動させる



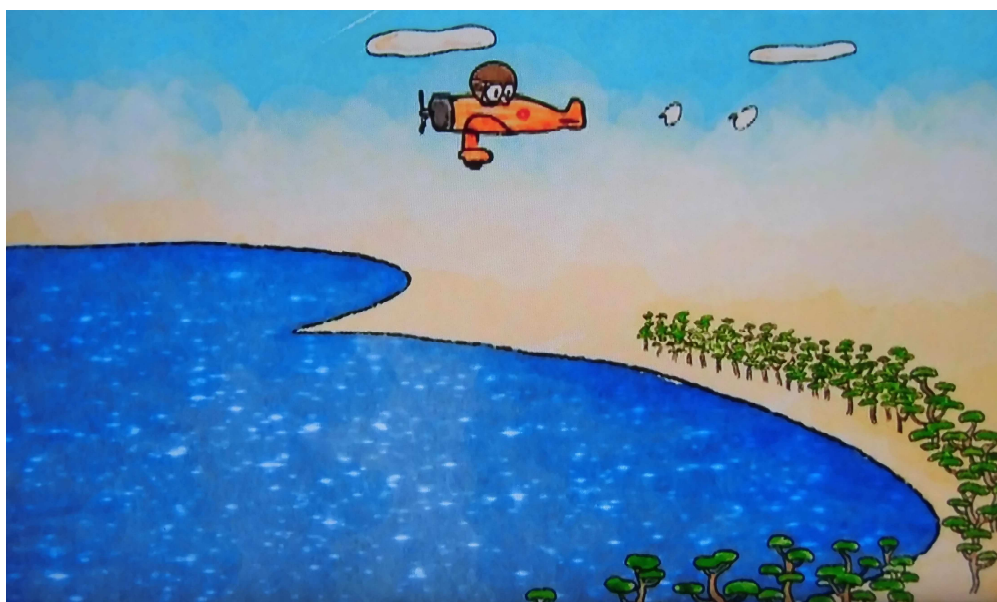
尾翼の「ミエ」は、三重海軍航空隊に所属することを表す。

◎ 初めての飛行体験



←解体される前の格納庫
(2010年 筆者撮影)

◎ 海の上を飛ぶ



三重海軍航空隊(鈴鹿)で重要な訓練の一つは「航法」でした。予科練の若者たちは毎日、香良洲(からす)海岸に駆け足で集合した後、風向き・波の高さを正確に読み取る訓練を行いました。

太平洋の上には交差点・信号も、目標になる建物も一切ありません。片道だけで数100キロから1000キロメートルもの距離を正確に飛ぶには、風で流された機体を元のコースに戻す必要があります。積乱雲を避けるために迂回すれば元のコースに戻すために、どれだけのどちらの方向に何時間飛ぶのかを正確・即座に計算することが求められました。

現在のナビゲーションシステムなど、どこにもなかった時代です。

二人乗り、三人乗りの飛行機の後方に乗っている航法士が時速何百キロメートルの風を受けながら上半身を航空機の外に出して海の波から風向き・風速を読み取りました。正確に海の上を飛べるかどうか航法の技術は、航空機搭乗員全てに必須のものであったのです。

◎ 誰のために描いたマンガなのか



予科練時代の山崎さん

このマンガを描いた山崎祐則(すけのり)さんは、軍隊で過ごした日々を多くのマンガに残しています。当時のかざらない若者の姿が描かれています。

いったい誰のために山崎さんはこれらを描いたのでしょうか。



山崎さんはこれらを川島和子さんのために描きました。

「マンガの得意な彼に何か描いてね。とノートをあずけると『予科練の一日』と題して面白いマンガとノートの隅に一字ずつモールス信号が描いてあった。」

と、川島和子さんは回想しています。

今の若者がスマートフォンを上手に使いこなすように、当時の若者は手旗信号やモールス信号でお互いの意志を通わせたのです。

しかし、これ以後若い二人の恋が進展することはありませんでした。



川島 和子さん(当時16)

◎「わが最愛の君 和子よ さらば われ戦場に おもむかん」



これがモールス信号で伝えた川島和子さんへの最後の言葉となりました。

◎ 兄の死と心の変化

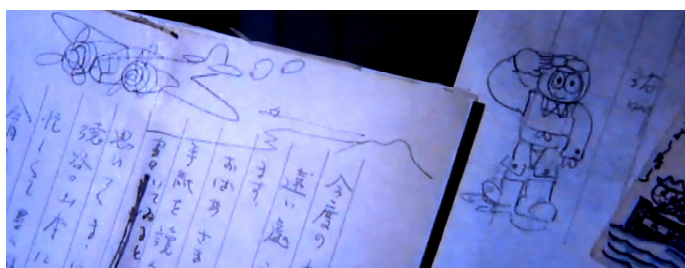
1943年11月2日、南太平洋ブーゲンビル島沖海戦で同じ海軍に属し敬愛する兄、山崎祐俊(すけとし)さんが戦死しました。



1944年4月、母にあてた手紙には次のように書かれています。

「兄上の仇(かたき)はきっと、きっと、きっと討ちます。私は軍人です。航空兵です。必ず仇を討ちます。」

人を楽しませることが大好きだったマンガ少年の一面は、しだいに陰っていきました。

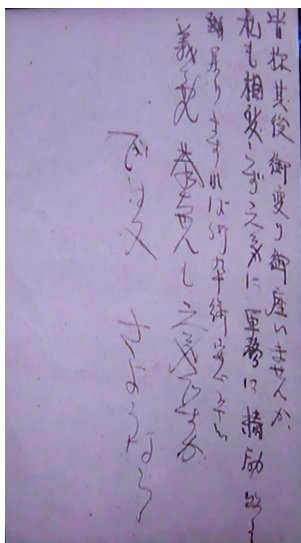


だんだんと色の抜けたイラストに

◎ 特攻を志願

山崎さんが予科練に入隊して2年、だんだん戦況は悪化し。1944年10月、起死回生をはかるため特攻攻撃が始められました。

予科練を卒業し、下士官となった山崎さんも特攻を志願しました。緻密で丁寧に描かれていたイラストからは色が消え、線も乱雑になっていきました。最後の家族にあてた下のハガキにはマンガもなく文字も書きなぐった様子です。

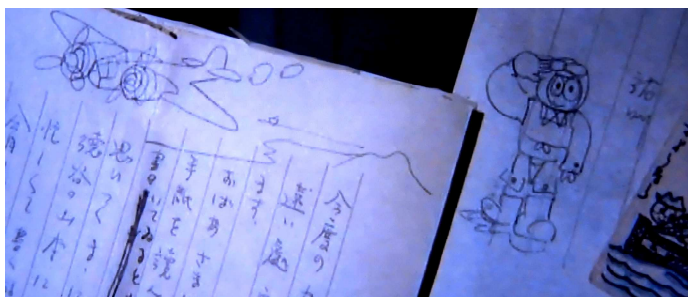


「皆様その後お変わり御座いませんか
私も相変わらず元気に軍務に精励致して
居りますれば何卒ご安心下さい
義ちゃん 泰ちゃんも元気ですか
では又 さようなら」

山崎さんは1945年3月21日、鹿児島県出水基地から特攻に出撃しました(享年19歳)。

特攻が命じられるのは、出撃当日の朝だったそうです。明日は自分の順番かと死を待つ日々はどのように辛かったでしょう。

◎ マンガ少年の死



山崎さんが搭乗して特攻に出た3人乗りの爆撃機『銀河』(イラスト左)。

海軍特攻・菊水部隊「銀河」隊。12機に3人ずつ(1機は2人)乗り組み、山崎さんを含む35人全員が戦死しました。この日、鹿児島県他の飛行場を飛び立った特攻と合わせると海軍だけで195人が帰りませんでした。

◎ 大空をかけめぐる夢と現実

大空を飛行機でかけめぐりたいという夢を持って予科練に入ってきた若者たちにとって、十分な訓練も無く特攻にかり出されることのつらさは如何ばかりだったでしょう。

やっと操縦を覚えたばかりの若者が、爆弾を抱えて敵の船がいそうな海域に向かって行ったのです。

天理にあった予科練の人たち(甲13期1943年12月入隊その他)の様子と鈴鹿基地にあった予科練の人たちとの様子は、同じ予科練であっても同じ内容だったのでしょうか。次回は天理の予科練と大和基地について学習します。

参考文献・資料

「マンガ少年の戦争」 NHK 2012年8月16日放送

「聯合艦隊」 草鹿龍之介著 毎日新聞社刊

「図説 特攻」 森山康平著 太平洋戦争研究会編 河出書房社

「予科練一代」 大多和達也著 光人社

「兵士たちの戦争 三重鈴鹿海軍航空隊」

NHK 2008年8月5日放送